

火浣布畧説

洋学文庫
文庫8
C 288



制之巧。多和克獲。多令俾魏女
 而在。將無有曲。論之。彼亦見
 乃鳩溪之不朽。而望山。信曜お
 一時者已乎。昭和乙酉。秋
 八月。桂川國訓序



火浣布略説



讚岐

鳩溪平賀國倫

編輯

武藏

門人

中島貞叔

中島永貞

全校

火浣布。又火毳くまともいふ。浣乃字澣くまの字おほりく。
 物を濯あらいしとみく。此布織ありたる火くまよ入て焼ある。垢あら
 悉ことごとく焼落て布あり少も損あげぬ。左ありたる火くまよ浣あら
 烈あ火くま乃中あ入。又あ油あよあらあてあ燃あせバ。墨油あよあ燃あせ
 布あハ猶あもあらあ。唐土あ中あもあ至あて得あぐある寶あと

周書（周書）載（載）。西域（西域）火浣布（火浣布）と獻（獻）と。汚（汚）る（る）を（を）ば
 則（則）あ（あ）ま（ま）火（火）燒（燒）ハ（ハ）潔（潔）。列子（列子）曰（曰）西域（西域）周（周）の穆王（穆王）は火浣（火浣）乃
 布（布）と獻（獻）と。是（是）を浣（浣）ハ（ハ）必（必）火（火）に投（投）と。布（布）則（則）火（火）色（色）。振（振）
 則（則）布（布）色（色）。火（火）より出（出）してあ（あ）ま（ま）火（火）振（振）ハ（ハ）皓（皓）然（然）と（と）て
 雪（雪）れ（れ）。東方（東方）朔（朔）ガ神異（神異）經（經）曰（曰）南荒（南荒）乃（乃）外（外）火山
 あり。長（長）三十里（三十里）廣（廣）五十里（五十里）。其中（其中）皆（皆）不（不）燼（燼）木（木）と生（生）じ
 晝（晝）夜（夜）火（火）燒（燒）。暴風（暴風）猛雨（猛雨）ふも滅（滅）ど。火中（火中）鼠（鼠）あり重（重）さ
 百斤（百斤）。毛（毛）の長（長）二尺餘（二尺餘）。細（細）く絲（絲）乃（乃）ことし。是（是）を以（以）て
 布（布）に作（作）るべし。常に火中（火中）に居（居）ま（ま）ハ（ハ）色（色）赤（赤）し。時（時）々
 外（外）に（に）出（出）く色（色）白（白）し。水（水）と以（以）てあ（あ）ま（ま）火（火）沃（沃）ハ（ハ）即（即）死（死）と。

其毛（其毛）を織（織）て布（布）とし。火浣布（火浣布）と號（號）く。抱朴子（抱朴子）曰（曰）
 南海（南海）の中蕭丘（蕭丘）乃（乃）上（上）自生（自生）ずる火（火）あり。常（常）く春（春）
 起（起）て秋滅（秋滅）。この丘上（丘上）一種（一種）の木（木）と生（生）と。火起（火起）るとハ
 あ（あ）ま（ま）木（木）小（小）く焦（焦）て黒（黒）し。夷人（夷人）此木（此木）の華（華）と取（取）て
 火浣布（火浣布）とし。木の皮（皮）も亦（亦）剥（剥）ぎ灰（灰）を以（以）て煮（煮）て布
 とし。但（但）華（華）の細（細）くして好（好）くハ及（及）ず（ず）ハ（ハ）又（又）白鼠（白鼠）あり
 大（大）なるもの數斤（數斤）。毛（毛）の長（長）三寸（三寸）。空木（空木）中に居（居）る。火（火）に
 入（入）て焦（焦）ま（ま）じ。その毛（毛）も亦（亦）績（績）て布（布）とを造（造）し。其餘（其餘）
 搜神記（搜神記）。後漢書（後漢書）梁冀傳（梁冀傳）。同西域傳（西域傳）。三國志（三國志）齊王（齊王）紀（紀）。
 束皙（束皙）發蒙記（發蒙記）。梁四公記（梁四公記）。任昉（任昉）述異記（述異記）。譙周（譙周）

異物志。張華が博物志。范泓が典籍便覽。高濂が遵生八牋。李時珍が本草綱目等の書に出る。又後漢の桓帝れん。大將軍梁冀火浣布と以て單衣とす。嘗て大に賓客と會む。冀伴て酒と爭ふ。杯と失して單衣を汚す。偽怒て衣を解てあまふ。燒布火を得て燃て灰のぶし。垢盡火滅まは繁然として潔白。灰汁を以て洗ふがおとし。と。ひも後漢書。傅子紀略等より出る。漢の代は西域より獻するもあつた。中略久しく絶てつくりしむかりぬえ。魏の初に至るハ。時の人火

浣布といふを名けしして。無とめなると疑へ。魏文帝以爲。火の性酷烈にして含生の氣なし。火よ入て燒さる物あらんやと。遂に典論を著して無しと決まりとす。明帝の代に至るに三公に詔して曰。先帝昔典論を著す。不朽の格言なり。太學石經と並に永く來世に示べしとて。石ふるざんて廟門乃外に立。志るに齊主の青龍二年。西域譯と重て火浣布と獻す。大將軍太尉詔し。燒て試て百寮に示す。於是は乃典論と刊滅す。天下是を笑ふ。又晉乃泰康二年。大秦國より火浣布と

獻けん也。殷いん臣しん奇き布ふ賦ふと作さて曰ま乃のち採さい乃のち析せき是は紡た是は績しん每ごと以もつ爲て布ふ不な盈あ數かず又また以もつ爲て布ふ帋た右みぎ諸しよ書しよ以もつ出い中ちゆう。梁りやう冀ぎが單たん衣いとせしと。晋しんの代しろは布ふ帋たとせし外ほかの其その布ふの大小たうせうともちるさば。多おほハ紙し上じやうの空くう論ろんとせし。目めのあつらへりといふ説せつなり。此この物もの唐たう玉ぎよとて織おひしは去きるは只ただ西域よくより希まれにきりきりするは。唐たう人にんも去きるはして。或あるハ火山かふざん蕭せう丘きうある火か鼠その毛け。まゝの木の華はな。或あるハ木の皮かわ等らうちく織おひしは。のといふは大方たうほうの誤ご也なり。蕭せう丘きう火山かふざん火かありて常じやうに白しろきども。是こゝハ即すなは陰いん火か又また寒かん火かともいひて。常じやうの火かを

あつて物ものを燒や火かよのあつて。抱か朴ぼく子曰いひ。蕭せう丘きうは自みづか然ら乃のち火かあり。一ひと種しゆの木きと生なして小こく焦こて黒くろく。陸りく游ゆう曰いひ。火山かふざん軍ぐん其その地ち鋤ちく耘くわて深ふかく入いる。烈りやく燄えんありて種しゆ植ちくと妨さまたげし。按おするに我われ邦はう越えつ後ご妙めう法ぽう寺じ村むらより出いる火かの類るいありて。物もの乃のち燒やる陰いん火かなり。其その陰いん火か中ちゆうに生なし。鼠そもとらき木きにもあり。常じやうの火かも入いる。これハ燒やるといふいふれなり。然しかと理りかゝるは唐たう人にんども。火かハ陰いん陽やう乃のち二ふた火かあり。事ことは去きるは。より火か浣わん布ふの外ほかは一ひと種しゆの物ものとて製せいする事ことは去きるは。不ふ替か乃のち説せつをき。大だいは笑わらべさる

之。又我邦より古より名づけて居て。其
 物と見しものもたゞゆゑに竹採物語と火
 浣乃裘（おほき）とて至ておれり。譬（たとへ）とすきと我
 邦とより其形状（かたち）と見るものさなり。予此物
 織（おほき）を考出（かきだ）して。過（あやま）し申（まを）乃（すなは）三月紅毛人
 ちうば創（つく）て製（せい）し出（だ）す。同（どう）し年（ねん）の三月紅毛人
 東都（とうと）に來（き）る。官儒青木先生對話（たいわ）の序と得て
 紅毛人に見せけり。おびとんやんがらんを。
 書紀へんでれり。でゆるところふ。外科（わいせき）ころねい
 れす。ほるすころまん。なご大（おほ）驚（おどろ）て曰（い）。此品

紅毛天竺とけり。め世界乃國（せかいのくに）くみくと織
 法（は）をちうば。とるところんと。といふ國（くに）よむし。
 人のりて織出（おほき）せり。彼國亂世（はにのくにのらんせい）して織傳
 を失（うしな）へり。故（ゆゑ）し此物絶（た）て希（まれ）なり。火浣布乃
 名（な）と。らていん語（ご）めり。あみやんとす。又あすべす
 とす。ともいつり。らていん語（ご）といふ紅毛國（こうまのくに）の雅言（がげん）あり。
 常（つね）の紅毛語（ご）より。すていんふす。又あつとふす。と
 色（いろ）のり。赤（あか）なり。あつとふす。むる。でる。げねいしゑん。あて
 ゆらる。こんでる。さあつ。うといと。一名まきさしとん。とん。
 うといと。といふ紅毛の書（しよ）よ出（だ）す。大通詞今村

源右衛門。小通詞猶林十右衛門。譯とほくとて是
と正せり

・とるところんと。とへ。西域の國乃名たり。凡世界と
呼ぶはより。名ろつと。あぢや。あふら。あしとら。と
りよ。とると國のわぢやの西。名ろつとの境あり。と
唐土より。數千里西北にあり。ひり。唐
土へ火浣布と獻し。西域西戎西番
かしく。皆此とると國なり。是等と
國を唐土へ通するは希にして。たましく
通するは。重譯して通詞と通詞と。

さの。これを其詞も通せらる。紅毛人を
彼國へとゆ。又我邦へも来るゆ。譯と
か。あるに。至ら。て其事通ぶ。今
詳かり。實に太平の餘澤と
いふは。

○火浣布とりの。香敷。作る。遵生
ハ。殘日。隔火。銀錢。雲母。片。玉片。砂片。俱
可。以。火浣布。如。錢。大者。銀鑲。周圍。作。隔
火。猶。難。得。又。典籍。便。覽。曰。火浣布。甚。難
得。嘗。有。如。錢。大者。銀鑲。周圍。留。火。上。燒

香と云ふなり。隔火ハ我邦とてハ香敷。又銀葉
 ともいふ。專せん雲母うんぼ又銀ぎんをく中ちゆう作さす。此
 二品ハ薄うすくしておく物ものゆゑ。火ひの移うつり急いそぐ
 て香氣かうきおどやのななげげ。火浣布ハ其質しつ軟やわふらく
 火氣ひき徐ゆる微こるゆゑ。香氣かうきおどやのななげげ。又雲母
 ハ數度すうどりらぬとんとんハ火ひをくね。銀ぎん火ひよよハ
 そりてよろよろししののび。此二品一度香と燒やハ木きの脂あぶら燒
 けて落おつつ。再香と燒やハ。初はつの移香うつかうありて。はふ
 らどああしし。火浣布ハ木きの脂あぶらけけききふふととハ火中
 に入れて燒やハ。脂あぶら少すくも殘のこり燒やおち。幾度いくどりらぬても

移香うつかうハゆゑ。唐土たうどめてハ隔火くわひ乃絶品たつてんとする
 かり
 ○予よが創製そうせいもハ火浣布くわんぷの隔火くわひ辱じやくと
 台覽たいらんと經へいその餘あまやんやんととハおんおんととハも獻けん
 もふ。又唐土たうどとと至寶しほうとと尊そんぶぶととハ諸書
 にははええととハ。試しハ彼國あつこくの人ひとに志しめめさんさんととハ
 公こうへへ上じやうあり。官くわんより 仰おほりて長崎ながさきハ
 今いま。異國いこく人ひとハ見みせせととハ。新あらたに 命いのちと受うく
 隔火くわひ五枚ごまいを製せいししぬ。



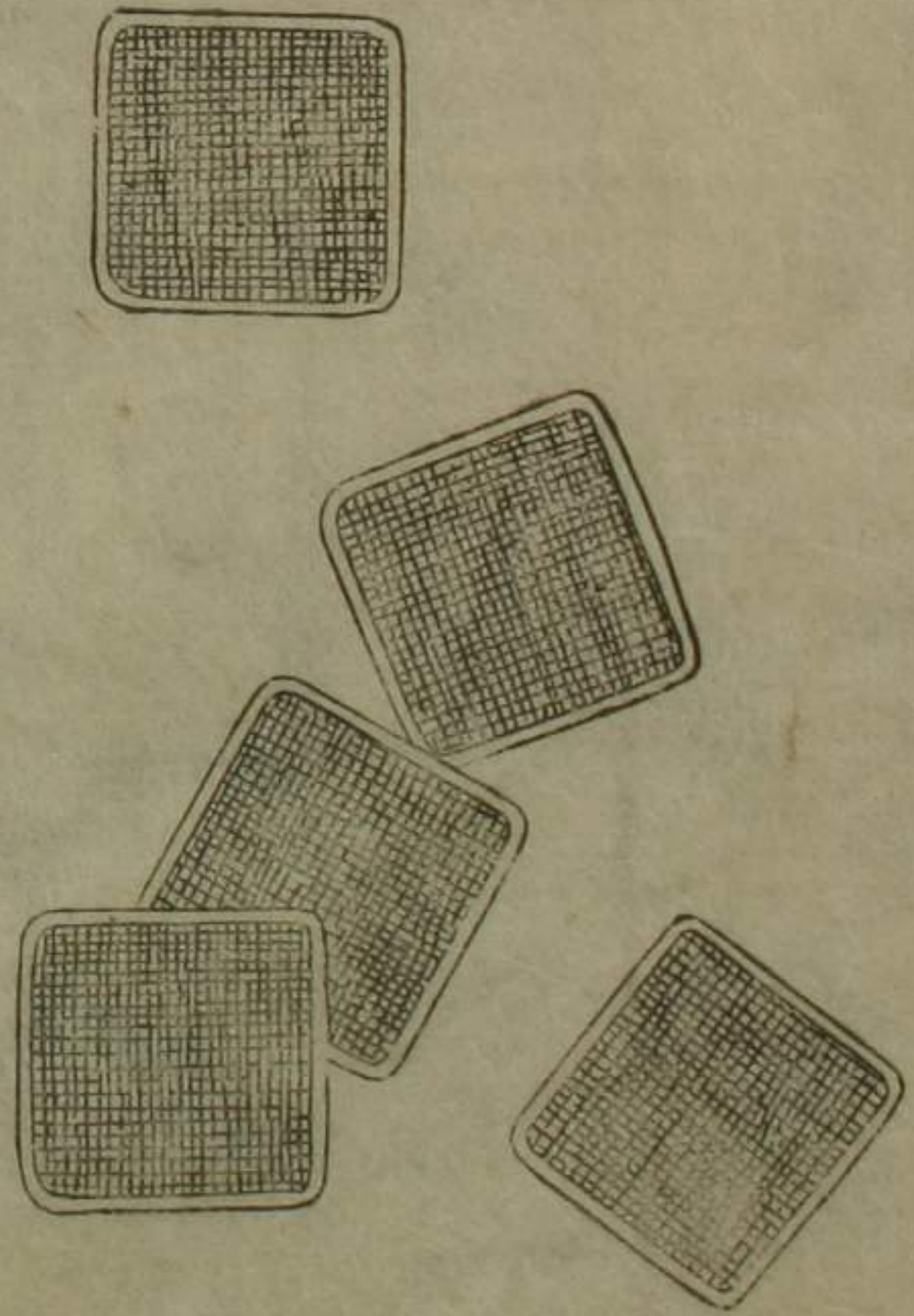
火澁斎時談
典論と
刊滅乃
圖

火澁斎時談

廿

火浣布隔火乃圖

火浣布隔火包紙の圖



火浣之布自古有名。彼妄造說臆度意量。木皮斯調鼠毛南荒。或果誣理謂傳者妄。漳溟造物寧可推窮。陽中有陰陰中有陽。

入火不化。柔能制剛。昔彼西戎。今我

東方。織成素縵。適以銀鑲。一片隔火百炷。襯香書堂清供。繡房風情。

明和甲申秋八月

大日本讚岐

鳩溪平賀國倫創製



右隔火五枚。

公以奉。十月中旬

官より

長崎へ贈り給けり。十一月下旬長崎より清人の呈狀来り。官より寫賜る。

清人呈狀乃寫

蒙

賜觀火浣布隔火一事。子等俱已公同領
 觀。但此物從古傳名。近所未觀。今
 國有此。名人博綜廣識。秘製精奇。實為
 罕見。筆難盡述。子等幸在崎館。得叨異
 遇。見此奇珍。公同賞嘆。欲通知在唐之
 人有此異寶。然有空言者。無實據。諒難
 見信。今欲給額數枚。帶回俾在唐博物
 之人。一同賞鑒。為此具單謹

覆

明和元年十一月日

- 未十番 南京船主 龔子興
- 全十三番 南京船主 項乾升
- 申一番 南京船主 趙可欽
- 全二番 寧波船主 黃恪齋
- 全三番 廣南船主 沈綸溪
- 全四番 南京船主 宋敬亭
- 全五番 南京船主 汪繩武

- 全六番 寧波船主趙紹統
- 全七番 南京船主崔景山
- 全八番 寧波船主唐重華
- 全九番 寧波船主黃世訓 顧舒長
- 全十番 寧波船主曹體三
- 全十一番 寧波船主朱秉鑑
- 全十二番 南京船主張雲衢
- 全十三番 寧波船主吳果庭
- 全十四番 南京船主邵詩南

右各有印

右之次文

火浣布之書委清見之秘私九一曰指見法以此
 古之名色傳承以始在是之終之見及不中其意當時在
 通轉綜廣識之何方秘製有之也實心希代之珍
 郭畫筆紙等每以折能存後清落下之奇品較好見
 何者亦步貴嘆仕以係在唐之者尤如新好之貴有之
 從物價仕以在實信不之云云之在信用仕者受
 多好以付以度一二枚好紙也 信付度者願以十九以
 度至之其紙較素君之貴實見為仕度者仍以書付
 中上以

明和元年十一月

未申諸侯私願於連判

右書舟之通和解於上中

林市兵場

何幸次右邊

蒙

賜觀火浣布隔火。若能可成後開馬掛衣料尺一寸。仰懇准買一件。何者敬等因圖帶面唐山欲作進獻之用。其價值即將六分參匏銀三百兩配買。但此品帶面進獻果中上意。將來再冷敬等採進彼

時具單呈懇給配仰懇恩准所求則感不淺矣。

計開

一馬掛一件

長九尺一寸

闊二尺四寸

係貴國小尺

以上尺寸織成方合進獻之用。如有五寸四方或乙尺四方者。俱不合唐山進獻之用。則不敢領買帶面。

明和元年十一月 日

申四番南京船主宋敬亭
全五番南京船主汪繩武

各有印

右之譯文

指見在 仰付以火浣布之番委若方書裁仕以子系
羽織寸尺 涉織立おぬり一志分涉更也 下度
草紙以右之私た見也とい唐國の持ぬ秋上之仕以子
二分愛海嵐靴銀之貫目と 愛波中及事好以以品持ぬ
秋上仕首尾能お納再の調進之令と承ぬ其意以
書付法更と後下上以右右草紙以色法 詳言也

成下以之非有仕合事好

免

一 馬系羽織

一 志

丈九尺五寸

但老金曲尺之候

幅五尺四寸

右之寸尺涉織立出仕の候上におぬり以
又寸以方又之志尺以方之小切之志上におぬ
不中裁局之志以方非置候事也

明和元年十月

申四番南京船頭宋敬亭
同 又番南京船頭汪繩武

右書有之通和解毒上中以下

林市兵部

何幸徳

按するふ。清人の火浣布と稱するなりと云るは左
もわりぬべし事なり。志書にも云る所然織乃
寸尺なれど然上と云ふもさども。ある寸に方一
尺に方の小切しては。然上はさうがゆををん
なりといふなりといふなり。まゝもいふなり
神異経。搜神記。抱朴子。發蒙記。述異
記。本草綱目の諸説は。さういふなりと云ふ

目れありえしにさるる。又梁四公記。
杰公火浣布三端と云ふ。木の皮と毛に
て織るたがむ有し。火をさるるなりといふ
なり。至て妄説ふして信ずるなりと云ふ。實し
西域より傳りたりと云ふなり。周の代西戎より
獻するなり。周書列子小云云。次は後漢
の梁冀が單衣と云ふものなり。三國志齊王
紀は然ありと云ふなり。晋の恭康二年に
獻したるものなり。唐土數千歳より西域よ
り傳りて書籍に記せしもの以上なりと云ふ

梁冀が持し、單衣りれば其狀大なりと見え。周の代并に三國乃時後りたる物の其大さも記さば。晋の時獻したる物の其大さ也。そきこふ殷臣奇布の賦と作て是と稱を。又遵生八牋。典籍便覽よハ。錢の大されど其物と隔火よ作る甚得がじと見え。のくかしの切さるも其變とすまば。又寸一尺乃切なりと云。唐玉よそを甚さるまば。事明白なりと。まづは右のまじくしふハ。高賈と專とする。船主どももゆゑ彼國の書籍乃おししともまじくゆるゆゑ

う。又ハ外よ意味も有べと事よやいとつづく。○清人の尋れ色。幅二尺に寸長九尺一寸に出来たりんや。公より清尋あり。倍てまづ試み幅一寸に長に寸三分乃物と書して。公にをり。程清人乃好くゆるせり。跡より作るも事とす。ぬけいめおろりの詳なり。火院布考に記し置れまじ。爰よ其のゆゑとまじくゆゑ

火浣布略說終

著述書目

物類品騰

全六冊 淨貞五百介圖 全三冊

嗣出書目

神農本草經圖註

藥品諸圖標工寫生形似逼真庶一覽認得不費辨說如其古人論說撮要刪繁務從簡約

同倭名考

專據源須和名抄丹波康賴和名本草萬葉集古今集等書參以近世諸家之說辨其當否

本草比肩

李氏綱目衆說繁蕪泛無歸宿今除本經二百六十五種外取千金方外臺秘要以下諸方書所載藥物考究論辨搜採諸家之長又師本經意分品者三以便醫家之用

食物本草

食物臭味日用不知可乎亦分三品氣味能毒忌畏反佐悉記無遺

火浣布考

四季名物正字考

日本穀譜

同菜譜

同草譜

同木譜

同石譜

同禽譜

同獸譜

同魚譜

同介譜

同蟲譜

右諸譜。每品有圖。名稱一從我邦雅言。附以方言俗言及漢名蠻名。其外國之種。不論生活乾腊。類附各品之後。以備博考。明和二年乙酉夏四月 平賀國倫識。

題 火浣布

右ハ詩文章歌發句序出本江戶私大方と
を考へて各卷を分ける集を以てより造る
板行仕い

江戸室町三丁目

須原屋市兵衛

同本石町通三丁目

植村 藤三郎

京寺町通松原下所

梅村 三郎兵衛

大坂心齋橋須原慶町

柏原屋清右衛門

書林

